

## 「ピークカー」とこれからの投資

株式会社グッドバンカー  
リサーチチーム

「ピークカー」という言葉があります。採掘可能な原油埋蔵が減少に転じることは「ピークオイル」と呼ばれますが、技術革新や新たな油田の発見により先延ばしになり続けていることが知られています。しかし、20 世紀以来製造業の中心であり続けた自動車の所有や利用が減少に転じるという「ピークカー」は現実のものになりつつあるのかもしれない。

スイスの Globalance Bank によると、世界の自動車保有台数は 2011 年に 10 億台を超え、2020 年までにはおよそ 2 倍になると予想されています。しかし、自動車 1 台当たりの年間平均走行距離で見ると、日本では 1990 年の約 11,000km から 2020 年には約 9,000km へと減少し、米英仏をはじめとしたヨーロッパ先進国でも同様の減少傾向が確認できます。また、自動車大国と呼ばれる米国でさえ、年齢別の平均走行距離で見ると、16-19 歳では 1990 年以来、それ以外の年代では 65 歳以上を除いた全ての年代で 2001 年以来減少傾向に転じています。

背景には都市化の進展があります。人口が都市部へ集中することにより、中心市街地での自動車の移動速度は時速 5km と極めて遅く、また人口過密によって移動先でも駐車場が見つからないなどの問題が起きています。こうした問題は先進国の都心部に限らず、北京や上海、ムンバイといった「メガシティ」でも深刻化しており、人々に自動車の利用を躊躇させています。加えて、これら発展途上国の都市部では環境規制が厳しくなっていることも、自動車の利用低下につながっています。

投資に当たり我々は一般に、「自動車業界」なるものを想定し、その中で燃費や環境性能の優劣を比較し、またガソリン車と電気自動車の行く末を予想しています。しかし、「持続可能な社会」を考えたとき、それだけでは十分でないことが分かります。「ピークカー」を予期させる人々の消費行動にも表れているように、利便性を求めて今後ますますの都市化が進む中で、自動車が必ずしも最適な移動手段とは限りません。環境保護の観点からは電気自動車や燃料電池車の普及が期待されますが、それも「自動車」という形態を取っていることには変わりなく、人々の都市生活を快適で持続可能なものにするとは言い切れないことが分かります。

SRI 投資においては、社会や人々の生活の変化を見越して、それらを持続可能なものにするための製品やサービスを提供している企業を見極める必要があります。「自動車」という枠組みの中では、ガソリン車よりも電気自動車を製造している企業の方が、持続可能性に貢献しているかもしれません。しかし、「移動手段」という観点で見ると、公共交通に関係する企業や、カーシェアリングのサービスを提供する企業の方が、都市生活をより持続可

能なものにする上で役立っているかもしれません。このように SRI 投資では例えば、「自動車業界」を「移動業界」と読み替えることで、大きな社会の変化を捉え、その持続可能性に貢献している企業に投資していきます。